《遺跡紹介》

Appia Antica 39 発掘体験記

田　中　の　え

私は、ドイツのハイデルベルク大学に交換留学中であった 2024 年 6 月末に、ローマのアッピア街道で行われている発掘調査に参加した。私にとって初めての発掘調査への参加であり、多くの刺激に溢れた体験であった。ここではその体験を記そうと思う。

発掘調査の概要

この発掘調査は、イタリア北部のフェッラーラ大学のラケーレ・ドゥッビーニ教授および同大学の文化遺産とコミュニティ研究室 ECeC の主催で行われている。このプロジェクトは、発掘申請から実施まで約 10 年を要し、2022 年についに始動した。発掘地は、プロジェクト名にもあるように、アッピア街道の 39 番地で、アウレリアヌス城壁からサン・セバスティアーノ門を出て最初の区間に位置する。この地域は、古代ローマにおける都市と農村の境界で、「ゲタの墓」（実際にカラカラ帝の弟ゲタの墓がある訳ではなく、伝統的にその名で親しまれている）と呼ばれ、未だに発掘の進んでいない地域である[1)]。

調査対象[2)] は、ローマの境域や領域を守るうえで重要とされる、マルス･グラディウス神殿およびその聖域である。この神殿は共和政期の前 1 世紀はじめから使われ、帝政盛期から少なくとも 4 世紀にわたって埋葬地として利用された。この時代には火葬によるコロンバリウム（納骨堂）での埋葬と、下層部には大規模なアーコソリウム（アーチ状の埋葬空間）内の土葬での埋葬が行われた。周辺にはフレスコ画やモザイク装飾も確認されている。3 世紀末から 4 世紀にかけては、アーコソリウムが増築される形で改修が行われたが、アルモネ川の水の湧出[3)]によって 6 世紀から 7 世紀頃に放棄されたと考えられている。この発掘調査を通じて、発掘地の土壌や埋葬形態の多様性を分析することで、古代末期への移行過程の解明が期待されているそうだ。

本発掘プロジェクトの独自性

本プロジェクトは、将来の考古学者の育成と公共考古学 public archaeology を軸としている。育成面では、学部生から PhD のあらゆる段階にいる考古学専攻の学生を対象に、プロの考古学者の指導の下、実地で技能を習得する機会を提供している。発掘調査では地層 stratigraphic layer を見極めていくのだが、一見同じに見える地層でも、プロの考古学者は地質の違いを見極め、セクションを分けて仮説を立てながら掘り進めていく。Appia Antica 39 では、そうした地層の違いについて考古学者が学生に丁寧に説明していた。また、例えば、技術の進歩により 3D などのデジタル技術が普及する中、あえて手書きで図面を作成させるなど、学生の基礎技能の習得を重視している点も特徴的である。他には、雨天時の陶片の分類に関するレクチャーや、San Gemini Preservation Studies [4] に参加する学生とそのアンフォラを専門とする講師を招待したレクチャーも行われた。こうした多様な体験を通じて、考古学の知識の乏しい私でさえ多くを学ぶことができた。イタリアでは、考古学専攻の学生に長期での発掘調査参加を義務付けており、教育面に力を入れるこのプロジェクトは、考古学者の育成において重要な役割を担っていると思われる。

一方、公共考古学の観点では、考古学の成果を一般に広く共有することに力を入れている。私が参加していた 1 週間にも、何度も観光客のツアーが発掘地を訪れているのを見かけた。また、特に YouTube や Instagram などの SNS を活用した広報活動を通じて、発掘成果を広く共有することにも精力的である。プロジェクトのメンバーには、コミュニケーション学を専門とする広報担当者もおり、発掘調査に直接的には関わらず、発掘物の撮影やコンテンツの作成、情報発信を行っていた。ちなみに、こうした策略が功を奏したのか、Appia Antica 39 は Instagram を使用する考古学チームの中で最もフォロワー数が多いそうだ。

こうした特徴から、プロジェクトを構成する参加者のバックグラウンドも多様だ。イタリア国内外の考古学専攻学生を中心に、モザイクやフレスコ画の修復の専門家、人類学者、発掘地の安全管理を行う技術者、さらには中学校教員や SNS 専門家がプロジェクトに関わっていた。

モザイク修復の専門家が作業にあたる様子

1日の流れ

測定と図面作成の様子

発掘は午前7時30分から午後4時30分まで、昼休憩1時間を挟んで進められる。私が参加した当時は主に、発掘現場に3グループ、陶片などの洗浄・分類に1グループおり、基本的には発掘現場の1エリアをずっと発掘し、週に1回ほど洗浄や分類のグループの順番が回ってくる仕組みだった。

陶片を洗浄する様子

発掘地が帝国の中心部から近いこともあり、陶片や牡蠣などの貝類、獣骨、人骨、ガラス破片などが大量に出土した。また、この場所が埋葬地として利用されていたために、バルサマリウムと呼ばれ、軟膏や香油の瓶として使用されていたと考えられるガラス製の副葬物も見つかった。鉄器時代を専門とする、ある参加者の学生が、この発掘地で発見される遺物の多さに驚き、作業量の多さを冗談交じりに嘆く場面もあった。また、発掘作業では、すべての発掘物を整理・保管するのが原則だが、遺物が大量に出土した場合や重要度の低い地層では、一部が廃棄されることもあった。このような効率的な作業運営は、考古学調査に初めて参加した私にとっては新鮮な驚きであった。

発掘された副葬品のバルサマリウム

私がいた1週間の間で最も大きな発掘物は、6世紀頃の地層から見つかった推定2歳の人骨である。私が主に発掘に参加していたエリアで発見されたため、私も実際にその掘り出しや撮影、測定といった一連の流れに参加することができた。驚いたのは、3mm程度しかない2歳時の足の指の骨まで、すべて土の中に保存されて残っていたことである。その発掘は、考古人類学が専門のPhDの学生の主導で行われたが、1つ1つの1cmにも満たない骨をどの部位の骨かを見極めて分類しており、専門性の高さに圧倒された。

また、最終日には発掘が30分ほど早く切れ上げられ、その時間にマインドフルネスという仏教由来の瞑想体験と考古学を結び合わせたセミナーが行われた。マインドフルネスとは、過去や未来ではなく、現在目の前に起こっているものごとを体験し、ありのままの自分に集中する過程のことで、この体験を通じて不安やストレスなどから解放されるなどのメリットがあるとされる。この体験では、考古学を通じて自分の起源や大地を感じながら、自分自身に集中することが求められた。この体験は全編イタリア語で行われ、イタリア語と英

語の得意なオランダ人学生が、イタリア語を話さない私のために同時通訳してくれていた。しかし、「何も考えないでください」などとインストラクターの方が言うたびに、そのオランダ人の学生は「イタリア語→オランダ語→英語」という複雑な思考回路を経由して私に伝えてくれるので、「何も考えない」という状態に至ることができず、私たち２人にとっては少し奇妙で面白い体験となった。他の学生たちも、この体験にどれほど没頭できていたかは疑わしいが、考古学という学問分野を新たな視点から捉えることのできる体験だった。

余談

１週間の発掘調査の間に気付いた「イタリアらしさ」を写真とともに記録しておく。

コカ・コーラのボトルに入っているエスプレッソ

コーヒーへの愛：夏の暑い天気の中、１日中肉体労働を行うため、みなマイボトルを持参しているのだが、水や冷たいドリンクではなく、温かいコーヒーを入れている人が何人もいた。また、昼休憩時には必ずエスプレッソが提供され、イタリア文化の一端を感じることができた。

喫煙文化：参加していた学生のほとんど（8割、9割方）が喫煙者で、自分でタバコを巻くことが一般的だった。自分でタバコを巻くと安いだけでなく、タバコをより純度が高く味わえるらしい。留学先のハイデルベルクだと、学生がタバコを吸うのはパーティーのときなどで、日常的な喫煙率はそこまで高くない印象だったため、同じヨーロッパ内でも全く感覚が違うのが興味深かった。

大きなポルケッタの塊は切り落として量り売される

ポルケッタとイタリアらしいドライブ：最終日には、豚肉をローストしたポルケッタという伝統料理を食べに、プロジェクトの皆と車で30分ほどのアリッチャという町に向かった。交通ルールなどの存在しない、命の危険を感じるワイルドなドライブの後に美味しいお肉を味わえた時は、言葉にできない多幸感に包まれた。

おわりに

先行研究や二次文献として今まで参考にするだけだった考古学の世界に直接飛び込み、一連の作業に関われたことは大きな学びであった。また、このプロジェクトでは、隣接分野の世界各地の学生と研究や学びについて意見を交換する機会にも恵まれた。こうした国際的な交流も、私にとって貴重な経験となった。このプロジェクトを紹介し、貴重な機会を提案くださった藤井先生、また、知識のない私を受け入れ丁寧に指導してくださった、ラケーレ・ドゥッビーニ先生およびプロジェクトメンバーにとても感謝している。

註

1）https://www.ecec.unife.it/portfolio-item/appia-antica-39-progetto-archeologico/ （参照 2024/12/29）

2）https://www.youtube.com/watch?v=sGhn0Ix5ErA（参照 2024/12/29）

3）このアルモネ川は発掘地のすぐ側を流れる小川だが、発掘地でも、その湧出により発掘が進んで高さの低い箇所では水が溜まっている様子が確認できた。その箇所は、アルモネ川の水位が下がる秋の発掘で重点的に調査が進められる、とのことだった。

4）考古学的に発掘された遺物の保存や修復に関する、2ヶ月にわたる夏のフィールドスクール。世界各地から学生が参加しているようだった。https://www.sangeministudies.info/（参照 2024/12/29）